

埃まみれ

深江財産区管理委員会
生活文化史料室理事 深山健 二

深江財産区管理委員会（太田垣正雄会長）が、地元の史誌編さん計画、御影高校の田辺真人先生の諒解を得て、その中心的役割りを果たしていただくことになりました。

早速、資料の収集や聞きとり調査など、史誌編さんの方法についての検討がなされ、同時に、資料の取納や展示を行なう為に、史料室の建設についても平行して計画されることになりました。

ちょうどその頃、自宅の改築を考慮中だった私は喜んで旧居宅内の資料の提供を管理会に申し出ましたが、大変だったのは、その整理と搬出でした。

史料室も昨年二月、地域の多くの皆さまに祝福されて、神戸深江会館生活文化史料室としてオープンし、千人を超える人びとの見学があったとうかがっておりますし、『歴史読本』昭和五十七年二月号などにも紹介されておりました。順調すぎる程の一年間で、本当に良かったと思います。

昭和五十五年春から灼熱の夏にかけて、太田垣正

史料室だより
第2号
1982・2・21

特集・一周年記念

編集 田辺 真人
発行 神戸・深江会館

生活文化史料室

〒650 神戸市東灘区深江本町3-15-17
電話 神戸(078) 41110475

雄会長、志井正夫委員、田辺真人先生、史料室員の渡部永子さんが中心となり、大奮闘の結果、少しずつ資料が、それらしい姿をあらわしてきました。

先代も足を踏み入れたことのないような内納戸をおおった埃は、実に一センチメートル以上にも積もり、約百年間の静かな眠りを、その場で実証しておりました。太田垣会長と志井さんは、ゴルフ帽をかぶって完全武装、その額に玉の汗、埃にゆがむ顔、眼だけを出している感じの渡部さんも埃まみれ、皆さんながらタイムマシンにでも乗って、嘉永年間にまでさかのぼって行かれたような感じすらしました。

ようやく出された資料の数々は、おびただしいもので、田辺先生のご指導により、手極よく振り分けられていきました。出来れば、この家ごと残すのがベストなんだが、と田辺先生がおっしゃっていたのを、今でも昨日のことのように覚えております。

誰にでも、なつかしい田舎がありますように、深江は、私にとってかけがえのない古里であります。唯それだけの理由で、私は、家の資料を差しあげることにいたしました。が、史料室オープン一周年に当たり、敢えて二年前にさかのぼって、皆さまのご苦勞をご披露申しあげたく、ポイントを絞ってご報告させていただきます。

昭和57年(1982年)2月3日

テレビ	神戸35 放送42	サン	姫路56 放送56
5	0	マグネロボ ガ・キーン	
	22	日本の旅◇31パニイちゃん	
	40	□TODAY ◇54因	
	57	□デスク [残そう生活史・街角のミニ博物館]	
6	15	T.V.フェニー 西納谷六朗	
	30	百獣王ゴライオン [幻との再会]	



完成直後の史料室

大日靈女神社の森に四角い深江会館。その左手に新築の史料室。



1981・2・21 史料室開館

約100人の参列者がわれわれの町のミニ博物館の門出を祝った。

番組になった史料室

オープン1年近くの2月3日の夕、街角のミニ博物館がテレビに登場しました。

深江の歩みと街かどの史跡

田 辺 眞 人

農耕生活のはじまり

この近辺では北方の山麓に森北町弥生遺跡があり、本庄小学校の校庭からは石斧や土器が出土した。約二千年前の弥生時代にこの地で営まれていた祖先たちの生活の跡である。

深江駅の西を南流する高橋川の川筋に注意してみよう。川をさかのぼると阪神電車の北で、川は直角に西にむきを変え、約四百メートル西でまた北にむきを転じている。東西、南北と直角に曲りながら直線状に流れるこの川の流路は、古代国家の班田収授のための土地制度——条里制の地割りのなごりだと考えられている。

踊り松の伝説

律令制のもとでそのころ近在は、摂津国菟原郡葦屋郷に属していた。

奈良時代の霊亀元年（七一五）、卯月卯の日の夜、まっ暗な深江の沖の海上に不思議な光が現われた。

浜辺に集った里人の眼の前で、光は岸に近づき、浜の松の大木の根もとに流れついた。そして光の中から、「われは稲荷の神。この山の手の森かげに祭れ」という声がきこえた。人々は喜んで、その松の周囲を踊りまわって神を迎え社を祭った。これが、深江の北方にある森の稲荷神社のはじめだとい、神さまの漂着した松はそれから踊り松とよばれるようになった。

また、一説では、ある時ひどい洪水があつて、森の稲荷神社も流されてしまった。その時、神さまがこの松の根もとに流れついてられたので、人々は喜んで松のまわりを踊りまわって神さまを森につれ帰った。そのため踊り松というのだという。

ともあれ、五十年ほど前までは、森稲荷の祭りの時には深江本町四丁目にあつたこの踊り松のところまで神輿のお渡りがあつた。

深江村の誕生

さて、深江本町四丁目に宇薬王寺という地名があつた。室町時代にそこに大日如来を祭る薬王寺という寺があつた。その寺のまわりの民家と、その東方にあつた豪族・永井氏の屋敷のまわりの集落とがわさつて、戦国時代に一つの村ができた。芦屋川の西の低地に入りくんだ入江があり、それにちなんで深江村とよばれるようになったという。

正寿寺と大日さん

文明年間（十五世紀）の薬王寺の住職観空は、深く運如に信服して寺を浄土真宗に改め、延寿寺と改称して本尊も阿弥陀如来に代えてしまった。その後、寛永十年に永井三左衛門が出家し、空照と号して寺をついだ時、ふたたびその寺は永井山正寿寺と改称され、今ある地に移されたと伝えている。

一方、観空によって寺から出された旧本尊の大日如来は、やがて村人にひきとられて祭られた。こ



れが深江村の鎮守で駅のすぐ南東にある大日靈女神社のおこりだといふ。おそらく古くは大日如来を本尊とした薬王寺の鎮守社だった社が、独立したものであろう。

江戸時代の生活

深江村は、やがて江戸時代には尼崎藩領となつて、戸田・青山・松平の歴代藩主に治められた。当時この村は農業と漁業が盛んだった。村人は春に田において稲にみのりをもち、秋には山に帰るといふ山の神や、豊かな漁を約束してくれる戎さまを信じていた。深江の山の神の石祠は今も六甲山中の風吹岩の南にのこっており、深江の東の浜には小さな戎神社がある。

大日靈女神社の南の東西の道路は、当時の西国街道の浜街道で、旅人も多く通った。道ばたの名所をつづつた、深江こゆれば大日如来 高い高橋おどり

松、という俚語もあった。明和六年（一七六九）、深江は灘の海辺の村々とともに収公されて天領となり、明治維新に至っている。

近代になって

大政奉還後、明治元年には兵庫県の管下にはいり、明治二十二年の町村制の施行に際して、西隣の青木・西青木の村々と合併して本庄村を形成した。本庄という村名はこのあたりに中世にあった荘園の名によっている。

以後、阪神間のこの地は着実に発展をつづけた。しかし、歴史の中には悲惨な経験もあった。昭和十三の水害や、第二次世界大戦中の空襲などである。

深江一帯は、昭和二十年五月十一日の空襲でほとんど潰滅状態になった。青木の浜にあった川西航空機甲南製作所（今の新明和工業）を爆撃するため、六十機のB29が数百発の爆弾を投下した。工場には二七〇発、東隣の商船大学には三十発の爆弾が落下し、この日の空襲で殺された人一二〇三名、負傷者八二四名と「神戸市史」は記録している。

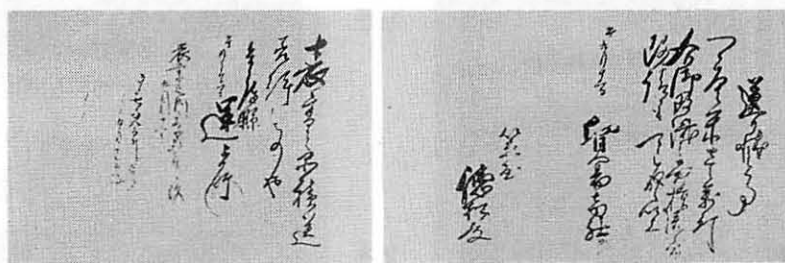
生活文化史料室

今の深江はこの苦しい破壊から立ち直って、戦後復興した新しい街である。しかし、このように街かどには永い歴史がひめられている。そのような街かどの歴史や郷土生活の資料を保存し展示しようと、小さな歴史館ができた。深江の村史調査で入手された約一千点の民具類を所蔵するこの「神戸深江会館生活文化史料室」には、打出焼などの陶磁器、祝い膳や漆器、古いカメラやトランプ、軍服や甲冑、農具や医具、明治初年の医学学校のノート、大正期の新聞などが順次展示されている。

史料紹介(一)

兵庫県運上所の積出し許可状二通について

慶応三年五月に兵庫開港の勅許が出され、明治元年一月には参与兼軍事参謀兼外国事務取調掛東久世通禧のもとで外国事務が開始さ



れて、ここに神戸貿易の歴史が幕を開ける。初期の神戸貿易は、明治五、六年以降については「神戸開港三十年史」明治三十二年刊、「神戸税関沿革略史」昭和六年刊によってその大要が知られる。しかし、明治五年以前の運上所（明治五年五月に税関と改称）時代については、資料も乏しくほとんど白紙の状態であった。

開港当初のことに重要なこの時期の神戸貿易史の空白を埋めるものとして、昭和四二年の「神戸貿易」一〇四号に、「自明治元年至同五年神戸税関統計表」が公にされた（同史料は、更に詳察が加えられ、神戸史学会発行「歴史と神戸」三〇号 昭和四三年刊に所載）。

神戸港には開港とともに資本主義諸国およびその植民地からの完成品・半製品が流入し、そのため西日本は完全に経済的植民地の状態に置かれた。元年から三年頃までの輸入品は、その圧倒部大部分が毛織物・綿織物の完成品で占められ、一方輸出は蔵物（江戸時代、幕府・大名・旗本らが蔵屋敷に回送した米・諸国の特産物）・

準蔵物を中心としていた。つまり輸出にあたって、外国市場目的の商品を生産したのではなく、元来は国内需要に應ずるために生産された商品を、諸藩が領内から強制的に買い集め、横浜・神戸などに運送させ輸出品にしたのである。

前述のように、この時期の史料はほとんどないのだが、本史料室には、明治三年の兵庫県運上所の積出し許可状二通がある。先述の「統計表」がその性質上、当時の貿易の全体像把握に役立つのに対して、この史料は、運上所での手続きなど具体的実務を知るうえで大きく貢献すると思われる。二通のうちの一通は次のとおりである。

所載の許可状は二通とも唐米の積出し許可状である。そこで「統計表」で明治三年の米に関する記載

(裏面)
表書之品積送
差許もの也

兵庫縣

午九月十二日 運上所印
表書之内式千式百斤改印
九月十三日

余七千八百斤普濟
九月十七日改

長岡 暁子

をみると、入庫品の頃に「支那米」があり、数量は一〇六八・七（單位不明、月数七・〇月、敷料二四二・九円となっている。入庫品とは、外国商人の求めに応じて運上所の倉庫で敷料を徴収のうえ、一時預った貨物のことであり、明治二年以降は、日本の他港から外国船で回漕されてきた輸出国産品をも預った。許可状の「唐米」は、この「支那米」に該当するものと思われる。二通はこのような入庫品の積出し許可状であることが判明する。

わずか二枚の文書であるが、史料の残存状況の悪い時期のものであるだけに、開港当初の神戸貿易を知るうえでの貴重な資料と思われる。（関西学院大学文学部学生）

(表面)
送り状之事
一、唐米壹萬斤
右御改済候品積送候間
改請取可被成候以上
午九月十二日
笠屋 貿易商社印
徳松殿

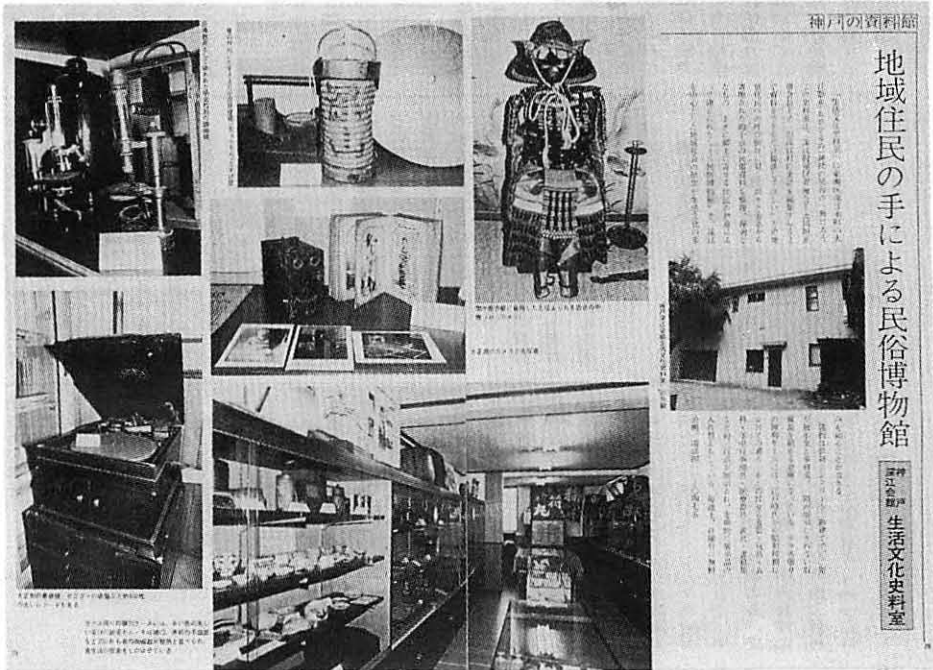


史料室紹介誌から



↑
新人物往来社
歴史読本
1982年2月号

神戸市 →
市民のグラフィック
こうべ
1981年11月号





↑ 神戸製鋼所社内報
ほむら
1981年4月号

← 神戸市東灘区役所
ひがしなだ
1981年4月号



↑
月刊神戸っ子
1981年9月号

生活文化史料室友の会会員〈入会順〉

1982年1月現在

手島 司	高橋 富雄	杉山 晴雄	山川はる江	森内百合子	坂上和三郎	清水 久雄
佐野 末夫	大川 弘	中島 義記	杉浦 昭典	浅井 敏正	磯辺 信三	飯田 信一
山村 昭	木下 正二	藤原 久子	山北 正夫	結城 正福	福田 毅	藤原 啓一
岡田 政人	高橋 敬三	石川さち子	又江 啓恵	位原 庸太	嵯峨山英樹	三浦 文子
尾崎 京子	金原 浩司	永井 真治	黒沢 勝	小熊 陽子	石田 初美	赤松 豊子
門前 喜康	門前 寛子	寺川 信子	小嶋 悦廊	原田 陽子	寺岡 一夫	小野山和子
加藤あおい	深尾 玲子	渡部 永子	植本 敏紀	植本笑美子	井浪 昭幸	加藤 賢治
坂本 憲一	佐賀 信一	立住 隆典	吉本 公一	中迫 一三	深山 健二	深山磨智子
深山 鉄平	深山 吉平	深山 逸平	深山 智子	中川 文雄	磯辺 譲	笠原ヤス子
天田 晃司	高志 直正	馬場 朋代	志井 保治	田辺 是子	牧野 克	湯浅みよ子
佐藤 信子	赤田 博	吉村和歌子	加納 友子	寺田 音松	村上 政輝	永井 正規
楠 美智子	志井 礼子	前中 隆一	久保川章雄	柴崎 数馬	菊池 泰平	谷口フミエ
田辺ゆかり	河合宗治郎	榊原健太郎	座古谷寿美	谷田 環	大川 常夫	黒田 智郷
鎌田 武	阪本 俊子	沢谷 ヒサ	堀内 康宏	橋本八重子	鎌田 純子	米津 和代
稲葉千代美	喜坂 米子	田辺 真人	多田 康治	納田 春雄	丹羽 信彰	太田垣正雄
榊原 稔	佐原 浩平	難波 宏彰	志井 正夫	岡田龍太郎	松尾 福夫	道谷 卓
八尾 重久	木下 重義	緒方 静江	森井日出夫	森井 朗子	森井 幸昌	久保 康子

協力団体

神戸市教育委員会 / 東灘区役所 / 神戸史学会 / 武陽史学会 / 芦屋市教育委員会 / 神戸商船大学 / 井上郷土玩具館 / 神戸華僑歴史博物館 / 株式会社大丸百貨店 / サンテレビジョン / 深江ショッピングセンター / 神戸製鋼所社内報編集部 / 神戸共同印刷 / 県立御影高校地歴部

「史料室所蔵の砲銃弾について」

土居 一郎

当初予想していたのとは異なり、第二次大戦以前の砲弾類について調べるのは甚だ困難な状況で、大砲・銃など武器そのものについてならまだしも、それに使用された弾薬ということになると、残念ながらお手あげに近いそうです。……特に日本では、研究体制の不備・人材の不足等から、実際にその砲弾の開発や製造・使用に携わった人々に聞いてみるよりないほど調べがつきにくいらしく、私の能力及ぶところではありませんでした。

それでもいくつかわかったことがありましたのでここに挙げてみます。……

小銃弾を除き、古くとも大正期以後のものと考えてよいようです。具体的には、まず弾頭に十〜百三十の目盛のついた径約七・五センチ、全長二七・三センチの砲弾ですが、これは弾頭時限信管の榴霰弾で、これだけ新しいタイプは昭和に入って採用された物と思われまます。

弾頭のない、径七・五センチ、長さ二一・五センチの砲弾は、比較的新しい(大正期ごろ開発)速射野砲(山砲)か、七センチ野砲(山砲)で、砲身長二センチ前後、重量三百グラム前後、射程四千五百〜五千センチの、榴霰弾・榴弾砲です。落下した砲弾が無数の破片となって飛び散り、人を殺傷するものです。

径八・五センチ、長さ三・三センチ程度のしんちゅうの円筒物は、雷管。竹の切り株のような長い方の長

さで三十五センチ、径九センチの円筒は、分離装填式の火砲の薬きょうのようです。

小銃弾は薬きょう底部にロシア文字の刻印があることから考えると、日露戦争当時のものかもしれません。

さて、おもしろいのは銃剣で、これが想像以上に古いものでした。正式名エンフィールド銃。日本ではなまってエンピール銃と呼ばれ、一方では発明者の名をとってミニエー銃ともいわれた歩兵用小銃の銃剣で、一八四一年フランス大尉ミニエーが発明、當時幕末期だった日本で、性能の優秀さと、日本の当時の軍隊が仏式であることが相まって、各藩に大量に輸入されたそうです。

以上、資料不足、能力不足に加え、卒論に迫られたため、やっとこの程度しか調べきれず、残念に思っています。今後も私の立場でお力になれそうな事項がありましたら、喜んでお手伝いさせていただきます。

(防衛大学校学生・昭和56年1月25日付)



「旧深江だんじりの擗り鐘」

鈴木 武

先日、史料室来訪の折、展示品の中で「擗り鐘」に、紀高粉川中田元清之作の彫銘をみましたが、江戸期のもものと見ました(左側の本庄村深江昭和八年……は後刻銘)。調査してみました所、岸和田市円満寺に同作の半鐘(紀高粉河町中田元清作)が現存しており、享保十二年(一七二七)銘であることから、明らかに江戸中期のものと思われ、出所等が判れば正寿寺との関係(宝暦四年——一七五四年銘の梵鐘現存)など興味ある研究課題もあるうかと思えます。

(神戸製鋼中央研究所・昭和56年11月18日付)

友の会の一年

門前喜康



二階バスでの市内史跡ツアー
(昭和56年12月6日須磨一の谷)

2年前の年の瀬、私と史料室との出会いがありました。当時私が担当していた番組の案内役を、田辺室長（郷土史研究者、県立御影高校教諭）にお願いして撮影場所のハンティングに深江の街を歩いていた時でした。熱っぽく史料室の完成を喜んでおられる田辺先生について史料を見せて頂きました。そして開室。私も友の会々員になっていました。

っている事が載っています。史料室を中心として歴史的な活動―何やらむずかしいイメージがなくてはいけません。はたして広がっていくのだろうか。私も少なからず心配でした。

しかしそれは第一回目の見学会（瀬の酒蔵と周囲の史跡を訪ねて）に参加していっぺんに吹き飛びました。見学会には、地元の方々もたくさん参加されていました。「ワシは長いこと何べんもこの前を通って来ました。「ワシは長いこと何べんもこの前を通って来たけど、そんなことがあったんかいナ、知らなんだナ」。同じグループで歩いていたらおじいさんが、そう言っておられるのを聞いて、配られた酒蔵で仕入れた酒を飲みながら何かうれしくなってくる気持ちでした。八月には南蛮美術館から摩耶山天上寺（一泊）へ、年末には二階建てバスでの市内一周と、文字通り立体的な企画が続ききました。

そして一周年。村誌の編さんもすすみ、今年中には史料編が完成するそうです。土地の人々が郷土を愛し、その核となる史料室を通して人々が集まりその輪が広がっていく、とてもすばらしい事です。これが本当のコミュニティと呼ぶべきものでしょう。ですから史料室はいつも私達の近くになければなりません。下駄履きで行ける（ジーンズ穿きか？）そんな史料室の活動が私の希望です。そしてできればあちこちの街角でこんな史料館が出来て、みんな下駄履きで訪ねて行ければ……。そんな気持ちで二年目を迎えています。（サンTV ディレクター）

神戸華僑歴史博物館 (館長 陳 徳仁)

9時～17時 (年中無休)

大人 300円 学生 200円 (10人以上団体割引有)

国鉄元町駅 西口から南へ5分の海岸通角

〒650 神戸市中央区海岸通3丁目東南角KCCビル2階
☎ (078) 331-1277

井上郷土玩具館 (館長 井上重義)

10時～17時 毎週水曜休館 (祝日は開館・翌日休館)

姫路駅から⇒国鉄播但線で23分の香呂駅下車
東へ徒歩10分。〒697-21 兵庫県神崎郡香直町中仁野671-3
☎ (07933) 2-4388

入会のおすすめ 神戸史学会 (代表 落合重信)

機関誌「歴史と神戸」(隔月刊)

会費・年額 2,000円 (1～12月前納)

〒653 神戸市長田区川西通3丁目8 太陽印刷内
☎ (078) 691-2085 振替口座 神戸4018

SUN-TV

SUN-TV

〒650 / 神戸市中央区港島中町6丁目9番1
TEL.(078) 302-3333 (代)

史料室の一年と資料提供の方々

赤松 豊子

早いもので史料室がオープンして一年。朝日・毎日・読売・神戸・日刊スポーツなど各紙のほか、雑誌として『歴史と神戸』『月刊神戸っ子』『市民のグラフこうべ』『歴史読本』などが大きくとりあげて紹介して下さいました(史料室に置いてありますからご覧下さい)。サントVや読売TV、ラジオ関西も電波に乗せてもらいました。お陰で、入室者は約千二百名(昭和五七年一月半ば)ほどになりました。

開室翌日には七十八名の見学者があり、三月六日には神戸市立幼稚園の東灘区内の先生方五十一名、五月十日には市立働く婦人の家の四十五名、十月二十四日には兵庫県学校厚生会神戸支部の四十七名という様に団体で見学に来られる方もありました。二月十三日には社会科学学習として本庄小学校から三年生二百名が見学に来られました。学校教育にこのように生かして頂ければ、とても嬉しいことです。見学者の大半は深江周辺の方ですが、県内では明石・加古川・姫路から、又県外では吹田・池田・箕面などからもお見えになっています。

寄贈品が増え、少しでも多くの資料を観て頂こうと、二度の小規模な展示替えを行いました。五月二十一日には、袴・大礼服に代って打掛けなどを出し、十一月十五日の展示替えでは、教育史や戦争の資料を中心に新たな資料を出しました。また、深江付近を描いた地誌を並べました。収集資料については、深山健二氏から寄贈された約一千点の資料が、この史料室の出発点でしたが、

その後、多くの方々からたくさんの方々の貴重な民具・史料・書籍の提供がありました。ここに協力して下さいました方々のご芳名と主な寄贈品を列記します。

- 深山健二(生活用具・医事史資料・文書・書籍)
 - 志井正夫(書籍・伊吹順隆(シ)・中川文雄(シ)・結城正福(シ)・林芳男(シ)・神戸市教育委員会(シ)・田辺真人(シ)・志井保治(古写真・戦時資料)・永井博彦(古記録・古写真・清水久雄(古銭)・黒田 博(時計)・小西秋二(生活用具)・三浦文子(玩具)・岩本正義(焼物)・金岡章文(地図)・鎌田 武(大漁簾・盃)・深江漁協(水産資料)・深江消防団(消防資料)・深江青年団(青年団資料)・松本ヤス(教育資料)・森信夫(農具)・伴せき(衣料・生活用具)・太田垣正雄(火縄銃)・永井静江(衣料)
- このようにして一年をふりかえってみますと、様々な事があつたように思われます。深江会館生活文化史料室を皆様方の御協力によって盛り立てて下さる様、今後ともよろしくお願い申し上げます。

新刊 只今、発売中です。

歴史の須磨

井川宏之 著 田辺真人 文

そこそこ豊かな歴史の香るまち、須磨。源平の昔から現在の新しい顔まで、歴史の須磨を豊富な写真と様々な文章で追う!

- B4変形32ページ
- カラー写真50点・モノクロ20点
- 定価1,200円
- 2月中旬発売!

神戸新聞出版センター

編者から

深江の地域史編さんの過程で集まった千余点の民具・史料を契機としてオープンした史料室も、はや一年/智恵を出しあい、右往左往しながら、やってきましたが、地域社会の歴史と生活文化の歩みを、幾分かはお伝えできたと思えます/何とか安定した運営もできるよになりましたので、今年は史料編さんを進め、史料集の刊行を予定しています/青少年協から依頼された夏休み歴史教室や、市民むけの郷土史講座も、できればと考えています/開室以来、室員にも異動があり、家事・就職などのため、渡部永子さんと深江玲子さんが退かれました/これまでのお二人のご尽力に心から感謝し、今後の運営や友の会の企画へのアドバイスを、お願いします/史料室だより第2号、いかがですか/前号は開館特集として、新聞紙上の本室の記事をまとめましたが、これからは資料紹介や考察を載せる予定です/本号の「深江の歩みと街かどの史跡」は市立働く婦人の家の「あじさい19」を再編、運上所の積出し許可状は、開港時の神戸史の貴重な史料です/雑誌に載った本室の姿も収録しました/開室以来、応援して下さいました市民有志、役所や報道関係の各位に感謝します/第二年度、どうぞよろしく。

史料室役員(五十音順)

理事	太田垣正雄	岡田龍太郎
志井 正雄	志井 保治	
田辺 真人	中尾 久一	
松尾 福夫	深山 健二	
調査員	赤松 豊子	天田 晃司
尾崎 京子	小野山和子	
金原 浩司	北島もと子	
嵯峨山英樹	永井 真治	
長岡 暁子	結城 正福	
友の会幹事	小嶋 悦郎	志井 保治
寺岡 一夫	門前 喜康	
植本 敏紀	(以上常任)	
大川 弘	植本笑美子	
佐原 浩平	佐野 末夫	
多田 康治	清水 久雄	
納多 春雄	田辺ゆかり	
	門前 寛子	

逢った新鮮

大丸

